

INFORMATION

平成28年乳用牛群能力検定成績（速報） ～ 一般社団法人 家畜改良事業団 ～

平成28年の乳用牛群能力検定成績速報がまとまりましたので、その概況をお知らせします。平成28年においては、305日乳量9,601kgと過去最高乳量を記録しました。繁殖成績については、全国平均が分娩間隔432日と、前年より1日間の短縮となりました。305日乳量は北海道と都府県ともに伸びていますが、都府県の繁殖成績は、分娩間隔の短縮には至らないという結果でした。

なお、本情報は家畜改良事業団のHP（<http://liaj.lin.gr.jp/japanese/newmilk/index.html>）に掲載していますので、ご参照ください。

1 牛群検定の普及状況

平成28年は、飼料価格や初妊牛・子牛の価格の高騰、生乳需給の逼迫など厳しい酪農情勢でした。そうした中で、牛群検定の普及率は前年と比較して横ばいとなっています。なお、同年の「畜産統計」は公開されていないので、ここに記す牛群検定の普及率は暫定的なものになります。

都道府県別にみた検定農家の普及率（検定農家比率）では、宮崎県の80.5%、鳥取県の80.1%を先頭に、鹿児島県と福岡県が70%以上、北海道、岡山県、熊本県において60%以上と高い普及率を示しました。検定農家の減少が多い中で、戸数を増やした県もあります。山梨県、山口県、沖縄県これら3県では、前年より検定農家戸数が増加しています。

2 305日乳量からみた泌乳能力の状況

図1のとおり、平成28年の305日乳量は北海道と都府

県ともに過去最高で、全国では9,601kg、対前年比151kg増になりました。これは、北海道での乳量が9,612kg（対前年比195kg増）と大きく伸びたことによるもので、平成16年以来12年ぶりに北海道の乳量が都府県を上回りました。

産次別の能力については、表1の初産8,670kg（対前年比176kg増）、2産10,013kg（同146kg増）、3産10,419kg（同181kg増）、4産10,383kg（同168kg増）、5産9,901kg（同151kg増）のように、各産次とも大きく乳量を伸ばしました。また、3産、4産に続き2産についても10,000kgを突破しました。

3 月別検定成績からみた生乳生産状況

平成26年から28年までの3カ年の月別検定成績の推移

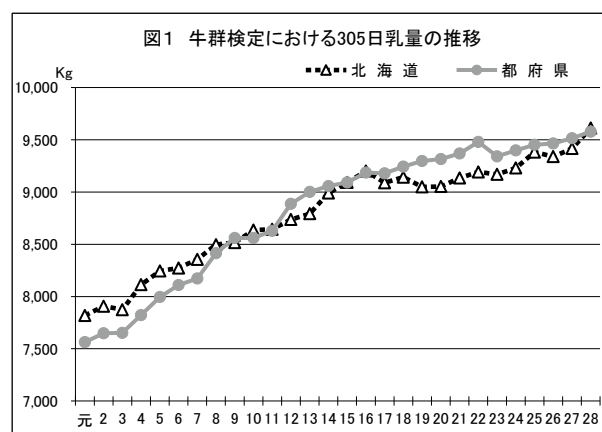


表1 産次別検定成績（立会検定・ホルスタイン種）

区分	産次	平均分娩時月齢(ヶ月)	頭数(頭)	乳量(kg)			平均乳脂率(%)	平均乳脂量(kg)	平均蛋白質率(%)	平均無脂固形分率(%)	平均濃厚飼料給与量(kg)	平均乳飼比(%)	平均飼効	平均体重能率指数
				平均	最低	～ 最大								
北海道	初産	24.8	65,175	8,659	1,526	～ 16,487	3.87	335	3.29	8.84	3,377	21	2.6	14.7
	2産	38.9	52,267	10,049	2,578	～ 18,619	3.89	391	3.30	8.77	3,461	19	2.9	15.8
	3産	52.8	36,462	10,445	1,790	～ 21,730	3.88	405	3.26	8.70	3,420	18	3.1	15.8
	4産	66.6	23,031	10,404	3,331	～ 24,941	3.89	404	3.25	8.67	3,368	18	3.1	15.4
	5産	91.8	25,104	9,860	2,675	～ 20,646	3.89	383	3.24	8.64	3,240	18	3.0	14.2
都府県	初産	25.4	34,325	8,689	2,025	～ 15,869	3.81	331	3.27	8.85	3,749	23	2.3	14.4
	2産	39.8	27,607	9,944	2,409	～ 18,767	3.84	381	3.28	8.76	3,843	20	2.6	15.6
	3産	54.1	18,351	10,369	1,167	～ 19,417	3.83	397	3.24	8.67	3,854	20	2.7	15.8
	4産	67.7	11,353	10,340	2,717	～ 17,515	3.83	396	3.22	8.63	3,847	20	2.7	15.6
	5産	91.3	9,641	10,008	2,377	～ 19,455	3.83	383	3.21	8.60	3,837	20	2.6	15.0
全国	初産	25.0	99,500	8,670	1,526	～ 16,487	3.85	334	3.28	8.84	3,508	22	2.5	14.6
	2産	39.2	79,874	10,013	2,409	～ 18,767	3.87	388	3.29	8.77	3,595	19	2.8	15.7
	3産	53.2	54,813	10,419	1,167	～ 21,730	3.87	403	3.25	8.69	3,567	19	2.9	15.8
	4産	67.0	34,384	10,383	2,717	～ 24,941	3.87	402	3.24	8.66	3,528	19	2.9	15.4
	5産	91.6	34,745	9,901	2,377	～ 20,646	3.87	383	3.23	8.63	3,407	19	2.9	14.4

注) 5産は5産以上の検定牛を含む。

をみると、平成28年の都府県では前年比較で僅かに上回る推移でした。北海道は7月頃まで極めて高い泌乳量を示しましたが、8月以降に減量し、11月と12月は前年を下回りました。北海道では8月に大規模な水害に見舞われ農作物に大きな被害が出ましたが、酪農においてもその影響が出ていると推察されます。

4 分娩間隔からみた繁殖成績

表3に示したとおり、分娩間隔は全国で432日と前年から1日短縮しました。過去最長だった平成23年の438日からみて6日間短縮しています。しかし、北海道と都府県で分けてみると北海道で1日短縮しているものの、都府県では1日延長しており、全国的に繁殖成績が改善しているとは言えません。各都道府県の分娩間隔は当団HPを参照してください。

図2の分娩間隔の分布でわかるように、分娩間隔の中

表2 分娩間隔の推移

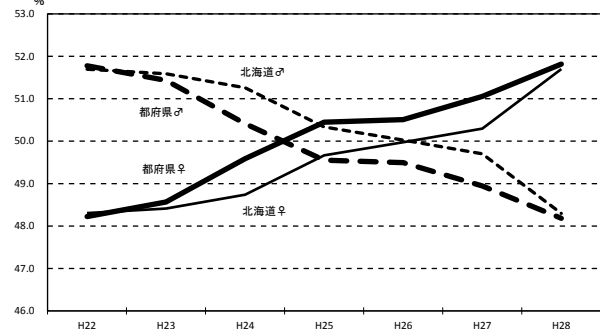
年次	分娩間隔日数		
	北海道	都府県	全国
平成元年	399	413	405
2	398	413	404
3	401	419	408
4	401	420	408
5	399	419	406
6	401	419	407
7	412	429	418
8	412	427	418
9	415	428	420
10	416	429	421
11	418	437	424
12	426	437	430
13	425	438	430
14	426	441	431
15	425	443	432
16	428	442	433
17	429	443	434
18	426	441	431
19	428	440	433
20	426	441	431
21	428	443	433
22	428	444	433
23	432	449	438
24	430	446	435
25	432	446	437
26	429	446	435
27	427	443	433
28	426	444	432

央値は407日です。これは国内の牛群検定牛の半分の頭数は分娩間隔407日以下と良好であることを示します。同図からわかるように、分娩間隔の短縮には、極端に分娩間隔が長期化した牛を出さないように早め早めの管理を徹底することが大切です。

5 雌雄産み分けの状況

図3は、近年における産子の性別の推移を示したものです。性選別精液が急速に普及しており、平成28年は、特に北海道でも雌雄産み分けが進み、都府県と北海道での雌雄の比率差はほとんど認められません。また、性選別精液は受胎率が問題視されることが多いのですが、前述の通り繁殖成績はゆるやかに改善が進んでいることから、酪農家全体の繁殖成績には少なくとも悪影響は与えていないと考えられます。

図3 産子性別の比率の推移(双子以上、死産を除く)



注) 産子は乳用牛が分娩した産子であり、交雑種と肉用種(ET)の産子を含む。

6 むすびにかえて

平成28年の年間集計としては、乳量と繁殖ともに好成績という結果となりました。しかし、熊本県下を襲った地震や、北海道、岩手県等を襲った大雨による水害は農作物に甚大な被害を及ぼしました。結果として、当初好調だった北海道での生乳生産は8月以降に減量し、その影響は平成29年になっても継続しており予断を許さない状況です。

また、牛が廃用される除籍月齢は68.9カ月(対前年比0.6月減)と短縮しており、長命連産を達成しているとは言いがたい状況となっています。乳用牛がベストパフォーマンスを発揮するには健康管理が重要です。牛群検定を活かした酪農経営を心がけて頂きたいと思えます。

図2 分娩間隔の分布(全国)

